

海外だより

Letters
from Abroad

スペイン

●第12回アンドレス・セゴビア国際ギターフェスティバル

アンドレス・セゴビアの生地であることから、そのメリットを生かしてスペインのリナレス市が世界にアピールする催し物がセゴビア国際ギターフェスティバルで、今回で12回目となる。毎年11月に行なわれるが、年々規模が大きくなり、2003年は11月9日から21日まで連日コンサートが開催された。すべての費用は主催であるリナレス市が持つが、日本ではこれほどの予算をクラシック音楽のために負担してくれる自治体が存在しないのが残念である。

まず登場したのはタンゴの天才ギタリスト、ファンホ・ドミンゲスとそのトリオ。彼の驚異的なテクニックは日本でも広まりつつある。今回の彼のギャラは6,700ユーロ（約87万円）と今回の出演者の中で最も高い。なぜギャラが分かったかという、市の職員が“内緒で”支払い証明書を見せてくれたから。スペインならではのきごとだ。翌日に出演したのはロベルト・アウセル。ヨーロッパでは評価の高い人物だが、前半をバロック、後半を現代音楽と、彼の好みのはっきりとしたユニークなプログラムを演奏した。

続く11日はマリア・エステル・グスマン。彼女は前半をバッハ、後半をボンセとC=テデスコのソナタと、重厚な曲を選んだ。

筆者は14日にピアニストの高木洋子さんと組んで、日本の曲やフランシスコ・クエンカが我々のために書いてくれた〈鎌倉〉、そしてお互いのソロで出演。ソロにしてもアンサンブルにしても特徴的な日本の曲は海外でも好まれる。その後、私たちはマドリッドの由緒あるアテオネ劇場をはじめ、5つの都市でコンサートを行なったため、その間のフェスティバルでのコンサートは聴けなかった。

20日にリナレスに戻って、ドイツのヴォルフガング・レントレの演奏に接した。彼はテクニックと音楽性を兼ね備えた人物で、アレンジも実に素晴らしい。ただ残念なのは、今はやりのギターを使用したために音にメリハリがつかず、彼の意図した表現が充分には伝わらなかったこと。レントレに限らず、名手でありながら良い楽器に恵まれないギタリストを結構見かける。

余談だが、翌日マドリッドに向かう列車内で、偶然にもパコ・デルシアと一緒にあった。彼はフラメンコ奏者はクラシック奏者以上に楽器に無頓着な人物が多いと話してくれた。ちなみに彼は製作者アルカンヘルに手付け金を払ってギターを注文しているにもかかわらず、もう3年以上も待たされているそうだ。

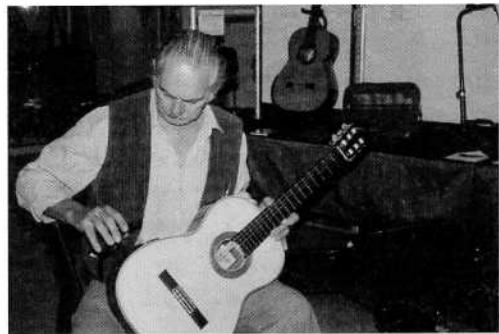
セゴビア国際ギターフェスティバルにはコンクールも併設されていて、今回はかつてないほどのレベルの高さだった。結果は1位：Alen Garagic（ボスニア）、2位：Thibaut Cauvin（フランス）、3位：Munuela Puente（スペイン）。

（手塚健旨）

ドイツ

●第11回国際ピングスト・セミナー

2003年6月、私はドイツのコブレンツで開催された第11回ペンテコスト・セミナーに参加した。今年のセミナーは従来よりギターに力を注いでいたようだ。フェスティバルやコンクールに参加するためヨーロ



製作者ミヒャエル・ヴィックマン

ッパに行くギタリストにとってはいい機会のひとつと言えよう。このフェスティバルには毎年コンクール部門が設けられているのだが、それはすべての楽器を対象に行なわれている。コブレンツ音楽院のギター科が非常に充実しているせいか、ギタリストが他の楽器を相手に受賞することが常であった。2003年は特にギターに焦点が置かれたフェスティバルとなっており、コンクールも国際ギターコンクールへと変更された。このコンクールの魅力的なところは国籍や年齢の制限がないことだ。プログラムもすべて自由曲となっており、しかも同じ曲をすべての審査段階で演奏することも許されている。コンクールのレベルも従来より極めて高く、参加者の国籍もドイツ、フランス、クロアチア、日本、スペイン、イギリス、アメリカと幅広かった。

審査員にはハバート・カーベル審査委員長を筆頭に、ガンター・シリングズ、カルロ・マーキオネ、ガーハード・ライケンバッハ、そして私。優勝したのは、素晴らしいバッハの演奏をしたモンテネグロ出身のゴラン・クリボカビックであった。彼は実に繊細な演奏をし、とても優れた音楽性と想像力を兼ね備えた演奏家といえよう。第2位はフランス人ギタリスト、アグネス・コンダミンが、第3位はドイツ人ギタリストのステファン・シュミッツがそれぞれ受賞した。コンクール優勝者には、ドイツ人ギター製作者、ミカエル・ヴィックマンより、5,000ユーロ相当のギターが贈られた。

このセミナーは、今年30周年を迎えるコブレンツ音楽院によって進行された。この音楽院には開院当時からギター科があったのだが、フーバート・ケッペルやゲオルグ・シュミッツを迎えた独自のギター専門家養成学校として知られる「ギターアカデ

ミー」が設立されたのは2001年であった。ゲオルグ・シュミッツが言うには、今日プロのスポーツマンを養成するような専門トレーニング施設に相当するものを、ギタリストのために設立したかったらしい。もちろん成果は表われた。ギターアカデミーの学院生は演奏家として成功し、国際コンクールなどでも受賞している。

2003年はスタートソーチェスター・レイニーシュ・フィルハーモニー楽団（以下SRP）が30周年を迎える年でもあった。1945年にコブレンツラジオ局の公式オーケストラとして設立された楽団なのだが、1973以来はラインランド・ファルツの公式オーケストラとなっている。祝典として、バーンハルド・イブシュタイン指揮によるSRPの演奏がライン・モーゼルホールであり、フェスティバルは幕を切った。曲はシューベルト、ハイドン、エリアス・バリッシュ・アルバーズ、ドヴォルザークの作品で、コブレンツ音楽院の若い演奏家たちが熟練の楽団員に混じり、完成度の高い演奏を披露した。最も印象的だったのは8歳のバスーニストだった。続いてコブレンツ音楽院の若い学院生、マノリス・アナスカサキス、ザカリアス・ジェンダーレイン、マティアス・ミュラー、ロベルト・ストルツから成るギターカルテットが、ロドリゴの〈アンダルシア協奏曲〉より第2、第3楽章を演奏した。

夜の部のリサイタルの多くは、街の中心に古くからある広場に位置するラソーサルで行なわれた。この広場には、石畳の上にテラスなどを設けたレストランやカフェが集まっており、古く美しい鐘が毎時を刻んでいる。この鐘が鳴る8時と9時に、演奏家たちは少しの間手を休めることを余儀なくされた。しかし、美しいものである。このホール自体の響きは素晴らしく、古い木壁や巨大な絵画が作り出す雰囲気は温かい。2003年、フーバート・ケッペルは他の3人のメンバーがイタリア人のルチアノ・マルアリ、ギリシャ人のソティリス・マラシオティス、そしてボリビア人のピライ・ヴァーカといった、言うならば国際色豊かな四重奏“フェニックス・ギターカルテット”で演奏した。お互いの国籍が違うにもかかわらず、彼らの演奏は、音楽面での考えや十分な理解力ということにおいては完

全に団結している。1人1人が独自の良さを持つ洗練されたギタリストで、全員での演奏も質が高い。実にまとまったアンサンブルで、体の動きも、同時に同じ方向に動かすなど、ぴったり合っている。あまりにも同時に動くので、見ていて楽しいくらいである。とてもよく編曲されたバッハの〈ブランデンブルク協奏曲第6番〉からドメニコニの〈オエン〉といった幅広い曲目で、カルテット形式の演奏が持つ特有の快感を彼らは明確に引き出し、それを観客は感じ取っただろう。

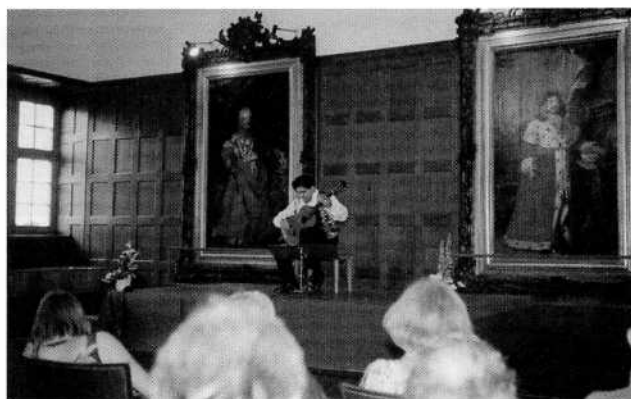
コスタス・コチョリスは、技術的に困ることはないギタリストである。しかしそれよりも、夜に行なわれた彼のリサイタルは、優れた音楽性と繊細さを示す心の奥深くに響くものであった。彼によるブローウェルの作品の演奏は、2人が長年に渡り良き友人であることもあり、魅了的であった。特に〈ソナタ〉第2楽章の〈スクリャーピンのサラバンド〉は楽しめた。今まで聴いた他のギタリストの演奏にはない完璧な流れだった、と私は感じた。それ以外にも彼が弾くパコ・デルシアの〈タラントス〉に私は非常に満足した。クラシック・ギタリストにとってタラントスのフラメンコ的な感覚を掴むのは困難だと私はいつも感じていたのだが、彼はとても上手く弾いていた。

ジュリアード音楽院のプレカレッジで講師を勤めるギリシャ人のギタリスト、アンティゴニー・ゴニーによるリサイタルが夜に行なわれた。とてつもなく暑い夜だったのだが、実際30℃に達する日があるなど、1週間を通していい天候に恵まれた。ブローウェル〈黒いアカメロン〉では、フレーズのかけ合いを、とても動きのある彼女独自のアプローチで演出した。特に楽しめたのは、セルジオ・アサドが彼女のために作曲した、〈3通のギリシャの手紙〉とモンボウの〈コンポステラ組曲〉より〈ムニエイラ〉だった。難易度の高い作品なのだが、彼女は実に上手く表現していた。

ドイツ人とベルー

人のハーフ、アレクサンダー・セルゲイ・ラミレスはほとんどドイツで育った。デンオン・レーベルより何枚かのアルバムを出しているが、ここ最近ドイツ・グラモフォンと契約したようだ。最後に話した時、彼はカメルーンのフランシス・ベベイの作品など、世界中から集めた曲からなるアルバム収録の直後だった。だがコブレンツでの彼のリサイタルは、カルリヤディアベリといった、むしろトラディショナルなプログラムだった。楽器もアリアス作の1884年製のギターで、一緒に出演したシーラ・アーノルドもダルケンのフォルテピアノのコピーを使用していた。フォルテピアノの音色の感触は素晴らしく、シーラ・アーノルドの演奏もアレクサンダー・ラミレスのギターとよく合っていた。残念なことに、音量のバランスがあまりよくなく、ギターが聴こえにくいことがあった。

世界初演となった“ワールド・ギター・アンサンブル（以下WGE）”のリサイタルにはシャンパンと食べ物を用意され、2003年6月8日にクアプーストリヒェス宮殿で行なわれた。このWGEは、アニエロ・デシデリオ、コスタス・コチョリス、ゾーラン・ドゥキッチ、ローラ・ヤング、ディヴィッド・タネンバウム、キャン・ライリー、ペッピーニョ・ダガステーノ、そしてトーマス・ミュラー＝ベリングといったメンバーで、ヘルムト・オーストライヒが指揮した。オーストライヒは評判のいいギターアンサンブル指揮者なのだが、この驚くべき顔ぶれのギタリストたちは、彼のバトンと常に合っていたとは言えない。これは私が察するに、この夜が初演だったということもあるだろう。しかし最も重要なのは、



コスタス・コチョリス



コプレンツの広場にある鐘

プログラムの中にギャン・ライリーの〈ムベッタポッタ〉、ベッピーニョ・ダガステイーノの〈地中海のきらめき〉、そしてフェディナント・フォーシュの〈7523〉といったWGEのために作曲されたおもしろい作品があったことだ。ギャン・ライリーは、有名なアメリカ人ミニマル作曲家、テリー・ライリーの息子で、長年に渡りギターをディヴィッド・タネンバウムに師事したのだが、クラシック・ギターとエレキ・ギターの両方を弾く演奏家である。彼の作品、〈ムベッタポッタ〉では、ベース、エレキ・ギター、クラシック・ギターがよく溶け合っていた。〈7523〉では、フェディナント・フォーシュがスペシャルゲストの打楽器奏者として参加し、素晴らしい音色の数々を作り出した。観客はこの作品をとてにも気に入った。

イタリア人ギタリスト、カルロ・マルキオーネは昼食時のリサイタルで、ジュリアーニの〈ロッシニアーナ第1番Op.119〉やバッハの〈チェロ組曲BWV1008〉を演奏した。しかしもっと観客を釘付けにしたのは、彼の編曲によるエンニオ・モリコーネの作品だった。モリコーネはたくさんの映画音楽を作曲している。マルキオーネの編曲と演奏はユーモアなセンスと色彩感覚で溢れており、聴く者は楽しむこと以外なにもできないだろう。彼は〈ワンス・アポン・ア・タイム・イン・ザ・ウエスト〉の主題と〈海のピアニストの伝説〉を演奏し、拍手かっさいの後、〈良き者、悪き者、醜き者〉の主題をアンコールで演奏したのだが、これもまた非常に魅力的だった。

ドイツ人ギタリスト、ゲルハルド・レイケンバックが演奏したバッハの〈バルティ

ータ・ホ短調BWV825〉は装飾音の使い方といい、よく編曲されたものだった。彼の落ち着いた演奏は観客をひきつけるものがある。彼の妻はギリシャ人なので、自然とギリシャ文化に深い興味を持っているようだ。彼はミクス・テオドラキスの〈3つのエピタフィオス（碑文）〉を編曲しているのだが、実におもしろく仕上がっている。

ティルマン・ホプシュトックが演奏した数々のブローウエルの作品は、ギターを学ぶ人たちの、特にこの度のコンクールで演奏した人たちの好みに合っていただろう。プログラムが自由とされていたこのコンクールでブローウエルの作品は実によく登場した。彼の演奏はとても詩的で、ブローウエルの〈悲歌〉とM=トロバの〈カステイリヤ組曲〉で作り出す音色は素晴らしかった。彼が弾くブローウエルの〈永劫の螺旋〉は〈雨のあるキューバの風景〉を連想させるものがある。ブローウエルの〈タラントス〉では、彼は3フレットにカポを付け、そのままパコ・デルシアの〈タラントス〉の編曲へと続けた。残念だが、フラメンコを弾こうとするクラシック・ギタリストのように聴こえ、あまりうまくいったとは言えない。

ギター講座の講師には、フーバート・ケッペル、アニエロ・デシデリオ、アンティゴニー・ゴニー、ゾーラン・ドゥキッチ、ディヴィッド・タネンバウム、トーマス・ミュラー＝ベリング、アレキサンダー・ラミレス、ゲルハルド・レイケンバック、そしてカルロ・マルキオーネが担当した。コンクールはギターのみだったのだが、セミナーには他の楽器や声楽も含まれた。シーラ・アーノルドのマスタークラスには多くの人が参加した。彼女は現代ピアノと古鍵盤楽器の両方を弾く演奏家で、彼女によって探求された表現法は幅広い。

2人のブラジル人、エリオ・ロドリゲス（ギタリスト）とラトゥフ・イサヤス・ムッチ博士（フルミネンゼ連邦大学——リオ・デジャネイロ）がゲストとして迎えられ、講座を行なった。ロドリゲスは、ブラジル人ギタリスト、オスロン・サレイロの作品の編曲を手掛けており、「オスロン・サレイロ——ブラジルのパリオス？」と題された彼の講座は、サレイロの経歴なども紹介し

た。知識を与える、というよりは、むしろ詩的といえる講座だったのだが、セミナーの参加者による演奏もあり、彼の作品の価値が少なからず伝わった。ラトゥフ・イサヤス・ムッチ博士は、長時間に渡りブラジル音楽学の創始者である、マリオ・デ・アンドラデの生涯を詳しく語った。

技師として教育を受けたミカエル・ヴィックマンは、ギター製作に使用される数々の機械を製造しており、自作のギターと共にそれらを展示した。右腕がギターに当たる部分に取り付ける肘置きを製作し、どのギターにも合うように作られているそのデザインは特許を取っている。ガート・ピーターセンのワークショップが、ドイツのコロ近郊にあるヘネファーハイスタシヨフで行なわれ、彼製作のギターが展示された。彼独自の表面板のプレイング法があるのだが、おもしろいことに、裏板のプレイングはネックの振動を活用し、より良い反応とサステーションの向上を助けるという。彼は、「ギターは音量のあるスピーカーではない。裏盤が薄いほど、音は温かくなる」と続けた。シュテファン・シュレンパーは、自作のギターと知名度の高い彼のアンブシステムを展示した。シャントレルはミカエル・マクミケンと共に音楽院に店を出し、楽譜やCDなどを豊富に取り揃え、ワキン・トレッケルもたくさんの楽譜やアクセサリーを店に並べた。

第12回国際ピングストセミナーは2004年5月25～31日に開催され、マニエール・バルエコ、ディヴィッド・ラッセル、フーバート・ケッペル、アニエロ・デシデリオ、カルロ・マルキオーネ、ゾーラン・ドゥキッチ、ジョン・アーバクロンビー、そしてファビオ・ザノンといった、総々たるメンバーがゲストとして参加する。プログラムが自由な、年齢制限なしの国際ソロ・ギターコンクールも行なわれる。従来はフェスティバルの参加者のみに制限されていたのだが、この規則は和らげられ、誰でも参加できるようになった。

問い合わせ先：ゲオルグ・シュミッツ（ディレクター）住所：P.O.Box 300547, 56028 Koblenz, Germany

☎：+49-170-311-5446

http://www.pfingstseminar.de

（ワシリー・サバ／訳：高見栄作）